

北太平洋における釣り調査によるアカイカの 分布 (1976—1983年)

谷 津 明 彦

(遠洋水産研究所)

妙 録

海洋水産資源開発センターが1976~83年に北太平洋で行った釣りによるアカイカ漁場開発調査から得られた1723回の漁獲記録に基づき、アカイカのC P U E (釣り糸1本1時間当たり漁獲重量(kg))を月別海区(緯度1度経度5度)別および月別表面水温帯別に、また、アカイカの平均体重を月別水温帯別に示した。同時に得られた外套長記録から体長組成を月別緯度5度経度30度別に示した。

全期間を通じたアカイカの釣獲水温は9~25℃であった。1~6月はいずれの水温帯でもC P U Eは1.0以下であった。7~9月は19℃付近と13℃付近にピークを持つ双峰型で、各月の水温帯別最高C P U Eは7月19℃で2.9, 8月20℃で5.9, 9月20℃で5.0, 10月13℃で4.6, 11月10℃で5.0, 12月15℃で7.1であった。C P U E 4.0以上の好漁が得られた海区は7月の155° E以西, 8月の170° E以西と145° W~180°, 9月の140° E~155° W, 10月の165° E以西, 11月~12月は調査努力が限られていたが165° E~160° Wであった。

アカイカの平均体重は、1~2月は約1000gで、水温との関係は明瞭でなかった。5~8月の高水温域では平均体重は約100~500g, 低水温域では約600~2800gであった。9~10月でも高水温域小型、低水温域大型の傾向が見られた。11~12月では水温帯にかかわらず平均体重は300~1600gであった。

5~6月のアカイカは、外套長35cm付近にモードを持つほぼ雌のみからなる大型群(主に170° E以东, 35~45° Nに分布)と18~20cmにモードを持つ雌雄混合の小型群(北東海域を除く全域に分布)から形成されていた。7~8月には小型群のモードは18~21cmおよび26~28cmにあり、大型群の割合は低下した。9~11月は小型群の体長は約16~40cmで多峰型の組成を示し、大型群は希となった。12月は40~42° Nでは11月同様の組成であったが、32~39° Nに48~52cmの群が若干見られた。1~2月では調査範囲が南偏(12~38° N)し、アカイカは23° N以北で釣獲され、40cm付近にモードをもつ雌群、30cm付近にモードを持つ雄群、および13~18cmの雌雄混合群から主に構成されていた。従来の知見を加えた論議から、5月の大型群は前年春に発生し、産卵せずに越冬した雌であると考えられた。

近年のアカイカ釣り漁業は8~10月に160° E以西で行われている。本調査では170° E以东でも8~12月には160° E以西に匹敵する高いC P U Eを記録した海区が見られたので、沖合域にも釣り漁場が形成される可能性がある。

従来のアカイカ釣り漁業では主に体重1kg未満の小型アカイカを対象、いか流し網漁業では体重1.5~3kgの大型アカイカを対象としている。いか流し網漁業が商業的に成立する5~7月に釣りに

よるCPU Eが著しく低かった理由は、(1)同時期にいか釣りの対象となる小型アカイカが加入していないこと、(2)外套長35～45cmにモードを持つ大型アカイカが主に170°E以東に分布するが、従来のいか釣り漁法では大型アカイカの脱落が多いためと考えた。

これらの結果および文献からアカイカ流し網漁業から釣り漁業への転換可能性について、1日当り漁獲量、大型いかの脱落、集魚灯および価格の面から論じた。

本報告の詳細は、遠洋水産研究所研究報告第29号に掲載された。

〔質疑応答〕

窪寺（科博）：いか流し網漁業では、長期間にわたり大型の雌アカイカ（LL群）を選択的に漁獲してきた。このことが資源に与える影響をどのように考えるか。

谷津：いか流し網漁業は、1978年に開始され急速に拡大した。漁獲成績報告書が整備された1982年以降、CPU Eはほぼ隔年の豊凶変動はあるものの一定の減少傾向は認められない。この間に漁場はほぼ一定で、漁獲効率に特に変化があったとは考えられないため、アカイカ資源は安定していると思われる。しかし、ご指摘の事実はもっともである。ここで紹介した「LL群はSS群の越冬したもので、LL群の産卵から発生するのはL群であり、順次群構造が1年毎に入れ替わる」という仮説は、この矛盾を説明できる。すなわち、LL群は独立しておらず漁獲の影響は数年間で見れば各群に分散することになる。（当日の返答に加筆）